開催報告「1970 ⇔ 2020　未来へ　愛媛県立美術館設立 50 周年記念展」

杉山　はるか

はじめに

愛媛県美術館[i]の前身である愛媛県立美術館は、1970（昭和45）年9月1日に開館した。2020年は開館50周年を記念する年であり、記念展として県立美術館が設立された50年前に遡り、開館前後の愛媛県内の美術について振り返るとともに、その遺産を次の世代へと引き継いでゆく契機とすることを目的とした展覧会を企画した。

県立美術館誕生の原動力となったのは、愛媛県美術会を始めとする多くの人々の熱意であった。多くの芸術家たちに切望された、美術品を展示するためだけに特化した美術館について語る上で、その設立を巡る歴史的背景を検証することは重要な道標となるだろう。

また、50年前の愛媛県内の美術の状況に目を向けると、1952（昭和27）年に創設され20年近く精力的に活動を続けていた愛媛県美術会が主催する県展が開かれていたことに加え、新たな美術の動きも芽生えていた。そのひとつが、1965（昭和40）年に結成された髙階重紀を委員長とする愛媛現代美術家集団であり、また、森堯茂や坪内晃幸を筆頭に前衛美術の動きが県内のあちらこちらで起こっていた。

本展ではこのような時代背景の中で建設された、美術館の建築自体にも着目し、その魅力を再発見する機会とした。そして、開館記念展となった「郷土作家展」。愛媛ゆかりの芸術家たちが約300人参加し、全館を使用して開催された盛大な展覧会であった。この展覧会出品作の内約20点が美術館に寄贈され、美術館の最初の収蔵作品となったのである。今回はこの郷土作家展を再現するとともに、開館初期に収蔵された作品を一望することにより、館のコレクションの成り立ちを改めて振り返ることとなった。

以下4章から成る本展を章ごとにまとめることとしたい。

1章　愛媛県立美術館設立への道

県内における総合美術展を振り返ると大正期に遡る[ii]が、会場は県公会堂であり、美術展だけではなく式典や講習会など様々な催しが開催された建物であった。その後も大規模な展覧会は県図書館や市庁ホール、三越百貨店、ヤママン百貨店、愛媛新聞社などの複数の会場に分けて開催されている。愛媛県美術会が発足し、第2回県展以降は、丹下健三が設計し、堀之内公園内に建設された愛媛県民館で開催されることとなったが、この建物は本来国体開催に際して設計されたものであり、美術展開催のためには仮設壁の設営や照明のことなど多くの不便が伴っていた。第2回県展の際の目録（図1）には、建築部[iii]の出品作として「美術館草案」が掲載されている。美術会では県展の開催に当たり未来の美術館の設計図を募集し、これに対して20点の作品が寄せられたのである。

一方で、県内における「美術館」の起源をたどる中で着目したのが、1927（昭和2）年の春の出来事である。国鉄予讃線の開通を祝して堀之内公園で開催された全国産業博覧会の関連事業として、現代美術展覧会（主催：松山美術協会[iv]）が道後公園内で開かれたのであるが、そのために仮設ではあるものの「道後美術館」（図2）が建設された。芸術家たちが主導で立ち上げられた美術館の姿に、県立美術館の姿が重なってみえる。

美術館設立に向けての動きが視覚的に如実に表れているのが、歴代県展のポスターである。1963（昭和38）年11月に開催された第12回秋季県展のポスター（図3）において初めて、「愛媛美術館建設推進のための」というキャッチコピーがタイトルの一部として大きく謳われている。その後も継続してこのコピーがポスターデザインに組み込まれ、さらには展覧会には美術館設立資金募集のための募金展が併設されていることも見て取れる。県の美術界の支柱として長らく中心的役割を果たしてきた藤谷庸夫、そしてその志を継いで県展の理事長となった河本一男、小泉政孝、また小泉と

ともに双璧として県展を率いた石井南放らによる長年の県や県内の経済界への熱心な働きかけが実を結び、いよいよ県知事・久松定武を会長とした「愛媛美術博物館建設期成会」が発足したのが1965（昭和40）年5月のことであった。本展では、美術館設立協力団体として、設立の際に期成会への参加や寄付を賜るなど様々な側面で支援してくださった団体を再調査して図録へと記載させていただいた。[v]

この期成会発足の同年1965（昭和40）年の1月に結成されたのが、愛媛現代美術家集団（通称：現美）である。髙階重紀、岡本鐵四郎、三輪田俊助らが中心となり、抽象表現を軸にした新しい傾向の作品が愛媛新聞社4階ホールで開催された第1回展で発表された。この現美においても、第4回展では美術館設立募金のための即売小品展を開催し、目録でも大きく美術館設立への協力を謳っている。（図4）

この現在も継続する現美結成においても支援した愛媛新聞社は、その長い歴史の中で、総合美術展などの大規模展も主導する[vi]など県内文化の発展に大きく貢献した企業である。美術館設立当時の取締役社長・高橋士は前述の期成会に向けての準備委員会においても中心的な役割を果たしている。

２章　愛媛野外美術展の時代

また、50年前は、愛媛県内でも前衛美術が大きく花開いた時代でもあった。その象徴ともいえるのが、1969（昭和44）年と翌年に開催された愛媛野外美術展である。会場は県立美術館が開館することになる堀之内公園を取り囲む、堀の堤や水辺であった。周辺には県庁や松山市庁舎が隣接し、見上げると松山城を望むこの場所は、現在も変わらず愛媛県の中心地といえるが、この場所に色とりどりで様々な材質から成る斬新な形状をした作品群が立ち並ぶ光景は、さぞかし見応えがあったことだろう。

この展覧会を中心となって支えたのは、坪内晃幸であった。坪内は吉原治良を中心に発足した具体美術協会に初期から参加し、松山に拠点を置きながらも精力的に出品を続けていた。県外で活動するだけではなく、その経験を生かして県内でもグループ展を企画し、県内での前衛美術の興隆の基盤を築きつつあった。そうした中で1966（昭和41）年に坪内が立ち上げたNEO BLOCKには、向井正孝、橘松子、中平達子、沢井善一が参加し、開廊したばかりのプランタン画廊で結成展が開かれた。時を同じくしてそのひと月後に同プランタン画廊で創立展を開催したのが三八会のメンバーである。同じ愛媛大学教育学部に学んだ矢野徹志、土居進、福井壽泰らがグループを結成し、それぞれの個性を発揮した展覧会を開催するだけではなく、県内美術全体の活性化を念頭に置いた会報誌を作成した。1968（昭和43）年から翌年にかけて3回のみ発行された『ART EHIME』（図5）は、若手作家から県展の理事長である小泉政孝まで、また文化部記者や画廊経営者なども含めあらゆる立場の美術に関連する人々の声を拾い、当時の県内美術をたどる上で貴重な資料となっている。矢野徹志は、1970（昭和45）年4月から新設の県立美術館の職員として勤務し、自らも作家として活動を続けながら、初代学芸員としてその後の前衛美術を始めとする様々な展覧会の開催の上でも重要な役割を担うことになった。

さらに本展では、新居浜市における美術の発展についても新居浜市美術館学芸員・井須圭太郎氏の協力を得て特化して取り上げることができた。[vii]住友の基盤となった別子銅山を配する新居浜では、県内でも独自の文化が発達した。新居浜で受け継がれてきた美術の流れを汲んだ新たな美術グループ「新創作」が発足したのが1964（昭和39）年。中心的立場にあった筒井年男や西原元らが現美にも参加し、またその後のグループ展を松山でも開催するなど、その活動は新居浜市内に留まることはなかった。

また、森堯茂の存在も忘れてはならない。上京し、抽象表現による彫刻の騎手として関東を中心に全国各地の野外展を始めとする展覧会に出品を重ねていた森は、1965（昭和40）年に松山に拠点を移した。森が1968（昭和43）年11月のNEO BLOCK展に招待作家として参加したことを機に、野外展の実現へ向けて急速に動き出したといえるだろう。県内では新しい画廊も次々と生まれており、人々が活発に美術作品を制作し、発表をしていた時分でもあった。新しい美術が大きく花開く下地が整っていたのである。

具体的な愛媛野外美術展の概要やその後の展開については、本展図録の拙文を参照していただきたいが、ここでは展覧会会期中に新たに収集した情報について触れさせていただく。第2回愛媛野外美術展の目録に出品作家として記載されている木田山日出夫は、出品の有無は依然不明ではあるが、美術評論家としてのみならず教育学者、また俳人として、拠点であった香川県内だけではなく、全国の有識者たちを相手に活発に活動しており、愛媛県内の作家や美術関係者とも幅広

く交流していた。[viii]また、同じく香川県から第2回展に参加した和田守弘が遺していた写真の中に、共に野外展に出品した嶝野寿蔵の作品制作を手伝う様子が写っていたことから、嶝野が所持していた同様の写真に写っている人物のひとりが和田であることが判明した。二人は当時同じ多摩美術大学で学んでおり、親しく交流していたことがうかがわれる。さらに、和田と嶝野双方が保管していた写真には、こちらも現時点では制作者不明であるが、水辺に浮かぶ作品を小舟に乗って展示する様子が写されていた。[ix]（図6）このように出品作家たちが互いに協力して作品制作や展示に当たった様子が見て取れるが、判明していない作家や作品についてなど、今後また継続して調査を進めることとしたい。

また本展では、当時の出品作家らの協力を得て、野外展出品作等の再制作が実現し、展覧会の大きな見どころとなった。（図7）

3章　愛媛県立美術館誕生と郷土作家展

愛媛県立美術館は、「愛媛県立美術博物館」という名称で設立準備が進められた[x]。その基礎設計の時点より、大きく関わっていたのは当然のことながら愛媛県美術会であり、県展を中心とした大規模展の実施という具体的な目的に即して様々な意向が汲み取られた。3者による競技設計を経て最終的に設計を担当することになったのは、大阪を拠点に現在も続く三座建築事務所であった。その創設者のひとりであり、所長でもあった徳永正三は、愛媛県今治市出身であり、その尋常小学校時代の同窓生には丹下健三がいた。丹下が設計した愛媛県民館の南側に、徳永の手による愛媛県立美術館が建つことになったのである。新設美術館は、周囲の豊かな木々の緑に溶け込むモダンな建物として誕生することになるが（図8）、本展では県建築住宅課の橘主幹に論考を依頼し、同氏の調査の成果である、三座建築事務所に残されていた貴重な設計図や写真などから、この美術館の新しい魅力を発掘した。[xi]この当時の建物は現在の美術館の南館であり、改修工事や耐震化工事を経て、ギャラリーや創作活動のための空間として活用を続けている。

1970（昭和45）年9月1日にオープンした美術館の開館記念展として、「郷土作家展」が開催された。9月1日から3日までという3日間のみの実施ではあったが、県ゆかりの作家約300名が参加し、地域に根差した美術館の幕開けにふさわしい内容であった。本展に出品された作品の内、野間仁根を始めとする県外で活躍する作家らの作品19点の寄贈が決まり[xii]、これらは当館の最初の所蔵品群となっている。本展ではこれらの作品を始め、郷土作家展に出品した作家の作品をコレクションから主に選定して出品し、郷土作家展を再現して紹介した。半世紀前の愛媛県内における美術の様相がこの展示により明らかになり、今後の美術館の進むべき道を模索する上でもひとつの大きな手掛かりとなった。日本画の好永紫芳、菅野剛吉、また洋画の吉金一郎、二神常貞、版画の池下昌徳など、今回の展示を機に改めて再調査すべき作家が多数出てきたことも本展の大きな成果としたい。改めて本展開催にあたり貴重な情報提供などの協力をいただいた方たちに感謝を申し上げたい。

また、開館記念展として郷土作家展に続いて開催された二つの展覧会についても言及した。ひとつは「改組第1回日展　松山展」、もうひとつは「愛媛古美術展」である。美術館設立の目的のひとつは、中央の大規模な展覧会の招聘であり、現に、開館記念展として郷土作家展よりも先にまず決定していたのは、日展の開催であった。日本を代表する気鋭の美術家たちの作品を間近でみることができるようになったことは、愛媛県の文化の歴史の中でもやはり大きな第一歩であったであろう。また愛媛古美術展も、美術館の次長であった乗松茂が特に力を入れていた分野でもあり、県内各地の文化財を借り受けて展示する画期的な内容であった。

4章　愛媛県立美術館の初期コレクション

最後の章では、県立美術館が設立されてからおよそ5年間で収蔵された初期コレクションを厳選して紹介した。[xiii]

この美術館が生まれた大きな契機となったのが芸術家たちの作品の展示公開の場や、全国や世界の美術を紹介する大規模展の開催を求める声であったこともあり、美術館は建物ありきでコレクションはゼロの状態でオープンした。

とはいえ、収集活動は美術館の大きな使命として設立時の指針のひとつに掲げられ、その開館当初より地道な調査活動が行われた。県内の収集家たちを探してその所蔵品を譲り受け、また館の設立にも協力をした県内企業の代表者たちも、自ら作品を収集するなど文化に明るい人々が多く、こうした人々からも作品の寄贈を受けた。そしてもちろん作家本人やその遺族からの寄贈もコレクションの大部分を占めている。今回の

展覧会出品作の内所蔵品はほとんど寄贈作品であるが、この章に限り寄贈者名を明記させていただいた。杉浦非水、畦地梅太郎、野間仁根、古茂田守介、天野方壺などの現在の主要コレクションを含むこれらの寄贈作品の数々は、現在に引き継がれている館のコレクションの礎となる重要な作品群であることが今回の展示でより明らかになった。

ここで、本章で紹介した作家の内、陶芸家・阿部祐工と写真家・新山清について簡単に触れておきたい。まず阿部祐工であるが、本県西条市出身で1950年代に砥部に拠点を置き、日本大学で師事した濱田庄司を始め、柳宗悦やバーナード・リーチ、また富本憲吉らを砥部に招いて共に作陶するなど積極的に活動した。北九州市に拠点を移した後のことではあるが、阿部本人からの寄贈を受けた花瓶（図9）からも、その大胆で素朴な文様や形状などから、大きく影響を受けたであろう民芸独特の特徴が見受けられる。また、新山清（図10）は本県松山市出身で、東京の理化学研究所に入所した後に独学で写真を学び、パーレット同人会に所属してアマチュア写真家として精力的に活動した。ドイツの写真家で、写真家の人間性や個性に重きを置いた、「主観主義写真」の提唱者として知られるオットー・シュタイネルトからも着目され、石元泰博らとともに展覧会に招待されるなど目覚ましい活躍を見せた。[xiv]疎開を機に暮らした郷里の愛媛県でも県展の前身となる美術展の理事を務めるなど貢献し、後進を育てることにも力を注いだ。PENTAXを生み出した旭光学の東京サービスセンター所長も務めている。

このように、本展を通じて新たな情報を得た作家も多く、3章でも述べた通り今後の継続した調査を課題としたい。

結びに

本展では美術館の設立という半世紀前の一大事業を中心に、県内の美術史を多角的な視点から振り返ることとなった。まだ、当時を直接知る世代が存命であり、聴き取りや資料の提供などを通して、作家や美術史家、美術館職員と様々な立場において引き継がれてきた貴重な遺産の数々を掘り起こし、わずかながらも光を当てることができたことは、本展の大きな成果である。本展を機に、今後の新たな半世紀を見据え、さらなる愛媛県の美術文化の発展のために貢献できる美術館を目指したい。

註

i　既存の建物の北側に建物を新築し、1998（平成10）年11月に旧館と合わせて名称を愛媛県美術館として開館。

ii　第1回伊予美術展覧会は、1923（大正12）年10月12日から19日まで開催された。

iii　第1回展の審査員には日本近代建築史上で重要な役割を果たした松村正恒ら6名が名を連ねている。その後応募者が少なく、1955（昭和30）年には商業美術部と合併した。

iv　松山美術協会は、現代美術展覧会開催のために組織された作家による団体。筒井昇が代表として愛媛新聞に寄稿し、美術展は本来全国産業博覧会自体の中に組み込まれるべきと嘆いている。（「松山美術協会主催の展覧会に就いて　筒井昇」海南新聞　1927（昭和2）年3月4日7面）

v　高木学編（2020）「愛媛県立美術館　設立協力団体一覧」,『1970⇔2020　未来へ　愛媛県立美術館設立50周年記念展　図録』p.159, 愛媛県美術館.

vi　1946（昭和21）年の1月29日から2月2日まで開催された県代表美術展を主導。これを機に愛媛県美術会の前身となる愛媛県美術協会が発足した。

vii　井須圭太郎（2020）「『ふたつのローカル』を超えて－新居浜における戦後前衛美術史　概観」,『1970⇔2020　未来へ　愛媛県立美術館設立50周年記念展　図録』pp.71-74, 愛媛県美術館.

viii　会期中に木田山（北山）節子氏（木田山日出夫夫人）より連絡があり、話を伺った。

ix　和田弥生氏（和田守弘夫人）、嶝野純子氏（嶝野寿蔵夫人）より提供。

x　土居聡朋（2020）「『愛媛県立美術博物館』から『愛媛県立美術館』へ　―愛媛県による美術館設立の経緯を巡って」,『1970⇔2020　未来へ　愛媛県立美術館設立50周年記念展　図録』pp.81-83, 愛媛県美術館.

xi　橘亮「今、愛媛県美術館南館を想う」, 同上, pp.76-80

xii　愛媛新聞「野間仁根の『薔薇』も　郷土作家展の19点県立美術館に贈る」1970（昭和45）年9月9日7面に詳細が掲載されている。実際に書類の手続きが完了したのは翌年。畦地梅太郎作品のみ出品作《さけぶ3人》とは別の作品《山のひととき》が寄贈された。

xiii　長井健（2020）「県美コレクション事始め」,『1970⇔2020　未来へ　愛媛県立美術館設立50周年記念展　図録』pp.118-120, 愛媛県美術館.

xiv　シュタイネルトが企画した「Subjektive fotografie 2」（1954年）には出品を断念するも、新山は主観主義写真の主要な写真家のひとりとして西欧でも評価されている。

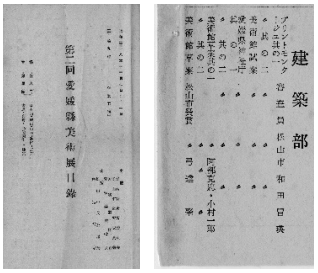


図1

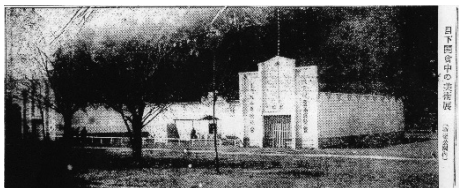


図2

図3

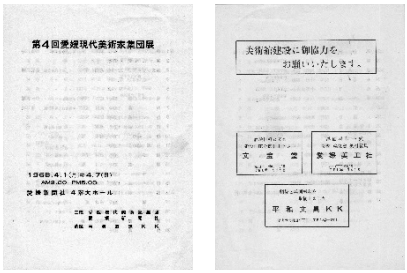


図4

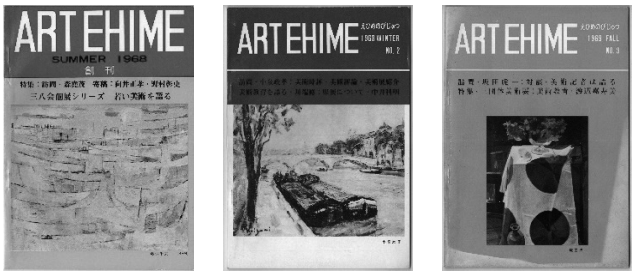


図5

図6 ①

②

③

④

図7 ①

②

③

④

図8

図9

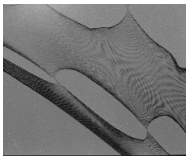
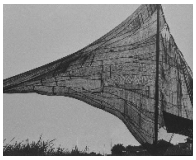


図10 ①



②

図1　「第二回愛媛県美術展目録」1953（昭和28）年　新居浜市美術館（西原元アーカイブ資料）蔵
図2　「目下開会中の美術展（道後公園内）」海南新聞　1927（昭和2）年4月9日（夕刊）1面　提供：愛媛新聞社
図3　「愛媛美術館建設推進のための第12回秋季県展」1963（昭和38）年　愛媛県美術会蔵
図4　「第4回愛媛現代美術家集団展」1968（昭和43）年　愛媛現代美術家集団蔵
図5　『ART EHIME』創刊号、第二号、第三号　1968-69（昭和43-44）年　個人蔵
図6　第2回愛媛野外美術展展示風景より　①嶝野寿蔵《SAKUHIN》展示風景　②作者不詳作品　③作品を運ぶ和田守弘
　　④展示作業中の嶝野寿蔵他　①③④各個人蔵
図7　本展展示風景より　①②展示室内再制作作品展示風景　③福井壽泰《作品》 ④土居進《テープA》
図8　完成当時の愛媛県立美術館
図9　阿部祐工《花瓶》1971（昭和46）年頃
図10　新山清　①《網（1）》1950（昭和25）年頃、②《網（2）》1954－55（昭和29－30）年